

カイザリヤにおいて、神のことばを異邦人たちも受け入れた、という知らせを受けた使徒たちやユダヤの兄弟たちは、それを喜ぶのではなく、むしろ、ペテロを非難しました。それは彼らには、それが主のなされたことであると理解できなかったからです。けれども、そこでペテロが、事の詳細を順序正しく説明することで、彼らにもそれが主のなされたことであることがわかり、彼らは神様をほめたたえました。

それが先週見たところですが、今日の箇所に出て来る弟子たちは、その出来事が起こった時には、すでにユダヤ以外の地域に散ってしまっていたから、そのことについて何も聞かされていなかった可能性が大きいでしょう。そのことを覚えながら、今日の箇所を見ていきたいと思います。19節「さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス（クプロ島）、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった」。

前に地図が出ます。ステパノの殉教から起こった迫害によって散らされた人々は、これらの地域にまで進んで行ったわけですが、彼らはただ旅をしたのではなく、「みことばを宣べながら、巡り歩いた」と8章4節には記されています。ただ彼らは、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。それは彼らのほとんどがユダヤ人たちであって、異邦人にもみことばを語るという考えが彼らにはなかったからです。

20節「ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた」。すでに地図を見ましたが、アンテオケとは、エルサレムから直線距離で約500キロ離れたところに位置する、ローマ帝国の属州シリヤの首都でした。人口は50万人以上で、ローマ、アレキサンドリヤに次ぐローマ帝国第三の国際都市として当時、商業で栄えました。そこには多くの外国人たちが集まることから、言葉や文化にも多彩であったようです。

その町で、幾人かの外国人弟子たちがギリシヤ人にも主イエスのことを宣べ伝えたわけですが、その結果、21節のことが記されています。「そして、主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った」。驚くべきことに、多くの異邦人たちが、主を信じて立ち返りました。それは、弟子たちがみことばを語ったからですが、それ以外の理由として、「主の御手が彼らとともにあったから」と説明がされています。

ここでギリシヤ人たちに主イエスのことを語ったキプロス人とクレネ人のことを考えてみたいと思います。彼らはどのような思いで、ギリシヤ人たちにもみことばを語ったのでしょうか？というのも、彼らはユダヤ人の弟子たちが、ユダヤ人たち以外にはみことばを語っていないことを知っていたはずですが、そして、その理由も理解していたと思います。彼ら自身が、どのような立ち位置であったかはわかりません。でも、ユダヤの地域を離れ、ユダヤ人以外の人々も多く住んでいるアンテオケに来た時、彼らはそこにいるギリシヤ人たちに主のことを宣べ伝えたのです。どのような思いで彼らはそのことをしたと思いますか？

私は、彼らがただ主への純粋な信仰とその救いを喜ぶところから、それをしたと思うのです。つまり、自分たちの主であり、救い主である主イエスのことをすべての人に知ってほしい、それを聞いて信じる人が、主の救いにあずかってほしいと願うところからであったと思います。そうでなければ、主のことを宣べ伝えることはしないのです。「主の御手が彼らとともにあった」のは、彼らをして、主を信じ、聖霊に導かれていた歩んでいた証拠といえます。また彼らは、使徒の働き1章8節の主のことばも聞かされていたと思うのです。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」。

22節「この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した」。どれくらいの時間を経てかはわかりませんが、アンテオケで大ぜいの異邦人が信じて主に立ち返った、という知らせが、エルサレムの教会にも入ります。そこで彼らは、バルナバを派遣するわけですが、なぜ彼らはバルナバを遣わしたのでしょうか？なぜペテロやヨハネのように、十二使徒を遣わさなかったのでしょうか？先週見たように、異邦人の救いは、決して小さなことではなかったはずですが、皆さんはどう思われますか？

その理由は記されていないので、わかりません。ただ、教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の弟子たちが諸地方に逃れた時、彼らはエルサレムにとどまりました。それは、その時すでにユダヤ当局に捕らえられていた人々のこともあったからだだと思いますし、彼らが約束の聖霊を受けたのがエルサレムだったので、そこを拠点とする考えが彼らにあったからだだと思います。ですから、イスラエル内を巡回するならまだしも、さすがに遠く離れた外国にまで行くことは、どこかためらいを覚えたのかも知れません。

もしかしたら、使徒たちがどうこうという前に、バルナバが自ら志願したことも考えられます。というのも、彼はキプロス生まれのレビ人（使 4:36）ですから、ヘレニズム文化に通じていたはずで、十二使徒ではなくても、初代教会の早いうちから、自分の畑を売って、模範的な弟子として、彼は主に仕えていました。レビ人というところからも、彼が聖書に通じていたことが推測されます。また、これは後でも見ますが、アンテオケに行った後、彼はタルソを訪れるのです。それはサウロを捜すためでした。

なぜサウロのことがここで出て来るのでしょうか？それは、回心後のサウロとエルサレムの弟子たちとの間を取り持ったのが慰めの子と呼ばれたバルナバだったからです。ですから、サウロは、使徒たちに受け入れられた後、みことばを語ることで、ユダヤ教徒たちから命を狙われ、故郷のタルソに帰っていたわけですが、バルナバは、彼のことが気になっていたのだと思います。そこにアンテオケでの知らせが入ることで、バルナバは、主がサウロについて語られた「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です」ということばを思い出し、アンテオケ行きを志願したのかも知れません。

23-24 節「彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。24 彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた」。アンテオケに着いたバルナバは、そこで神様の恵みを見て喜ぶわけですが、彼がそこで見た神の恵みとは、いったい何を指していたのでしょうか？つまり、バルナバはそこで何を目撃したのか？それは異邦人たちをして、彼らが主への信仰によって神様をほめたたえているのを見たのだと思います。聞かされていた通り、大ぜいの異邦人たちが信じて主に立ち返っているのを見て、彼は喜んだのです。

そして、バルナバは、こう言って彼らを励まします。「みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているように」と。当たり前のことを言いますが、どんな人にとっても「常に主にとどまっていること」は、自然に起こることではありません。一度主を信じたら、あとは自動的に信じ続けるようになるということではないのです。そこには、「常に主にとどまろう」と心を堅く保つことが問われます。そして、それは一人ではできません。そこに互いの信仰を励まし合う兄弟姉妹の存在、つまり、キリストのからだとしての教会の存在が必要なのです。私たちをして主にとどまり続けるには、同じ主への信仰に立つ仲間の存在が必要不可欠です。

ここにバルナバという人が、「りっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった」とあります。ここから私たちは、「主の御手が彼とともにあった」と結論付けることができるでしょう。それゆえに、そのすぐ後に、「こうして、大ぜいの人が主に導かれた」と続けられています。この大ぜいの人々が、さらに加えられたことも理由であらうと思いますが、先ほど見たように、バルナバはサウロを捜すために、この後、サウロの故郷タルソへと向かうのです。そして、彼に会うと、アンテオケに彼を連れてきました。

25-26 節「バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、26 彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」。バルナバが、サウロをアンテオケに連れてきた理由、それはそこで主を信じた大ぜいの異邦人たちを教えるためでした。彼らは、まる一年、教会に集まり、人々を教えるわけですが、あなたにとって一年間の聖書の学びは、長いと思われませんか？それとも短いと思えるのでしょうか？

それを長いとするか、短いとするかは、それぞれ違うと思いますが、でもアンテオケの人々が、まる一年間、バルナバとサウロを通して教えられた時、そこには確かな変化がもたらされます。つまり、「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった」というのです。主語が「弟子たち」と複数ですから、「キリスト者」と呼ばれたのは、誰か個人ではなく、アンテオケの弟子たち、つまり、アンテオケ教会でありました。英語では、“Christians”と訳されています。

なぜ彼らはそう呼ばれたのでしょうか？それは彼らが、何かにつけて「キリスト」と口にしていたからです。また、その行動において、キリストへの信仰に基づいて行われていたからです。これは間違いなく、バルナバとサウロの影響ですが、彼らの信仰が、その生き方にも表れ出ていたことが、27 節以降に記されています。

27-30 節「そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。28 その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。29 そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った」。

ユダヤ人の歴史家ヨセフォスによれば、このアガボが預言した大ききんは、紀元 46 年に起こったとされています。「世界中」ですから、当然、アンテオケも大ききんの影響を受けたはずですが、そこがローマ帝国第三の国際都市で、商業で栄えた町という点からして、おそらくそこにはまだ物質的な余裕があったのでしょう。では、どうですか？裕福であれば、分け与えるかという、必ずしもそうとは言えません。むしろ「裕福な人ほど、ケチが多い」とも言われたりします。いずれにしても、アンテオケ教会は、この大ききんの中で、ユダヤの兄弟たちに対する援助を決め、それを実行し、バルナバとサウロによって長老たちに送るのです。

このようにしてアンテオケ教会は始まりました。それは幾人かの外国人弟子たちによって、主イエスのことが異邦人たちにも宣べ伝えられるところから始まったのです。彼らは、バルナバを通して「みなが心を堅く保ち、常に主にとどまっているように」と励ましを受けました。また、バルナバとサウロを通してみことばを教えられることで、彼らはまわりの人々から「キリスト者」とあだ名をつけられるほど、キリストのうちに成長したのです。そして、それを裏付けられるようにして、彼らは、迫害とききんの中で苦しむユダヤの兄弟たちに対して救援物資をささげることで、愛の実践を行いました。

実は彼らをして「キリスト者」と呼ばれることの中には、軽蔑の意味が込められていたと言われます。つまり、いつも「キリスト、キリスト」といって主への信仰によって歩む彼らをあざ笑う意味もあって、人々はそう呼んだというのです。でも、それが彼らをして主への信仰を捨てる理由とはならなかった。なぜなら、聖霊を通して神の愛が彼らに注がれていたからです。みことばを通して主イエスがしっかりと彼らを捉えておられたからです。ですから、彼らは主にとどまります。そして、異邦人宣教の拠点的教会となるのです。

よくいうことですが、自分が主イエスに愛されている、ということを知らずして、誰も主のすばらしさを知ることはできません。そして、主のすばらしさがわからなければ、主への信頼（信仰）をもつことはなく、人々に主のことを宣べ伝えることもしないのです。主が十字架にかかれた時、ユダヤの指導者たちは、主のことをあざ笑ってこう言いました。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ」（ルカ 23:35）。

もし主がそこでご自分を救っておられたら、どうですか？「もし、神のキリストで、選ばれた者なら…」とキリストであるご自分をあざ笑う者達に対して、主がご自分のいのちを捨てるのではなく、救われていたら、私たちはどうなっていたのでしょうか？みな、自分の罪に対するさばきを神様から受けて滅びるしかないのです。でも、主は耐え忍んで下さいました。かえって、「父よ、彼らをお赦してください」と、父なる神様にその身を差し出すことで、私たち罪人が赦される道、恵みにより、主への信仰によって救われる道を備えて下さったのです。主イエスこそ、神のキリストです。主は死よりよみがえられ、今も生きて、ご自分を信じる者を聖霊をもって導いて下さいます。このお方に聴き従う行こうではありませんか。